

——『異界』。
 ここではないいずこか、此岸しがんに対する彼岸ひがん、伝承の土地
 におとぎの国、もしくはは、いくつも存在し得るといわれる
 並行世界。

それらが「発見」されたのはそう最近のことではない。
 昔から「神隠し」と呼ばれる現象は存在しており、それが
 『異界』への扉をくぐる行為だということは一部の人間の
 間では常識とされていた。

だが、『異界』が我々を招くことはあれど、『異界』に対
 してこちらからアプローチする手段は長らく謎に包まれて
 いた。

そのアプローチを、ごく限定的ながらも可能としたのが
 我々のプロジェクトだ。人間の意識をこの世界に近い、『異
 界』と接続し、その中に『潜航』する技術を手にした我々

は、『異界』の探査を開始した。

もちろん『異界』では何が起こるかわからない。向こう
 側で理不尽な死を迎える可能性も零とは言いつれない。故
 に、接続者のサンプルとして秘密裏に選ばれたのが、刑の
 執行を待つ死刑囚Xであった。

彼は詳細をほとんど聞くこともなく、我々のプロジェク
 トへの参加を承諾した。その心理は私にはわからないが、
 Xは問題なく『異界』の探査をこなしている。

寝台に横たわる肉体を残して、Xの意識は『異界』に『潜
 航』する。Xの視覚情報は私の前にあるディスプレイに、
 聴覚情報は横に設置されたスピーカーに出力される。肉体
 と意識とを繋ぐ命綱を頼りにたった一人で『潜航』するX
 の感覚を受け取ること、私たちは『異界』を知る。
 かくして、今日の『潜航』が、始まる。

「そういえば、Xは、時間にはきっちりし
 てる感じがするよね」

「そう、でしょうか」

「何となく、寝坊や遅刻とは縁遠そうだ
 な、と思ってるんだけど」

「それは、確かに、そうです」

「意識していることかあるのかしら。も
 し、時間を守るコツがあるなら教えてほし
 いわ。私、昔から、時間にルーズすぎるっ
 て、よくサブリーダーに怒られてて」

「しかし、あなたが遅れているところも、
 見たことない、ですが」

「目覚まし時計、三つくらいかけてるし、
 それでも目が覚めなくて家族に起こしても
 らつてるし、更に定時連絡がなかったら、
 絶対二度寝してる、ってメンバーにモーニ
 ングコールしてもらってるから……」

「……なるほど？」

「一応、直そうという気持ちはあるのよ？
 だから、Xが心がけることがあるなら、
 知りたいなって思ってる」

「意識しているわけでもないの、何とも
 ですが……。自分を理解して、対策を取っ
 ているだけでも、十二分ではないですか？」

「そうかしら？」

「その、私の、昔の知り合いに、……本当
 に、本当に、信じられないくらい、めっちゃ
 くチャルルズなやつが、いますよ」

「あなたがそんなに強調するなんて、本当
 にルーズだったのね……」

「本人は全く気にしてなくて、待ち合わ
 せ場所でも二、三時間待つこともザラで、電
 話ももちろん通じず、私は、私は……」

「苦労してきたことはよくわかったわ」

なんでもない日のXと私

2023-11-23 / ぺらふえす 2023 秋 参加作品

シアワセモノマニア
<https://happymonomania.com/>

青波零也 Aonami Reiya
aonami@happymonomania.com
 X(旧 Twitter): @aonami



「どけ、そこを通せ！」
声と共に、デイスブレイに映る視界がくりと揺れた。突き飛ばされたのだ、と気づいたのは一拍後のことだった。

視界の主、Xの視線が己を突き飛ばした人物に向けられる。道行く人を突き倒しながら走るその人物は、背中しか見えないが、背広を着ているのがわかる。首から上、頭に当たる部分は、四角い箱に見えるが……。

「大丈夫ですか？」

声をかけられて、Xは頷きとともに傍らで自分を支えてくれた人物に視線を戻した。目を合わせよう——としたのかもしれないが、本来「目」があるべき

そうとしていた。

今回、Xが降り立った『異界』は産業革命前後の西洋の街並みと思わせた。「こちら側」のそれと違うのは、街の中心に巨大な——そう、天にも届くほどの巨大な時計塔が聳え立っていること、街のいたるところに時計が飾られていること、だ。大きな

さや形こそ違えど、その針は全て同じ時刻を指している。そして何よりも「こちら側」と異なるのは、街を行き交う人々の姿だった。

確かに首から下は「こちら側」の人間と何も変わらないように見えるが、首から上が、どこからどう見ても「時計」な

案内人の頭を成している時計と——街中に満ちている時計と、別の時刻を指している。

「そう、この街は、あの大時計が全ての基準なのです。我々もまた、大時計が示す朝に目覚め、夜に眠り、日々の時を刻むことで、秩序を保っています」

しかし、病に侵されると、何もかもが狂ってしまう、と案内人は言う。

「深刻な病です。周囲と同じ時を共有できず、誰よりも早く動こうとしたり、ひどくルーズになったり、人によつては、ほとんど動きを止めてしまう」

そういえば、私の部屋にある

そこには、ただ、文字盤があるのみだ。十二の数字が書かれており、短針と長針が示しているのは、二時二十三分。午前か午後かは判然としないが、空の明るさを見る限り午後と考えるのが妥当か。『異界』を「こちら側」の常識で考えてはならない、というのは前提としても、だ。

小屋の形をした木製の時計を首から上に載せたその人は、無口から溜息を漏らす。

「すみません、痛かったですよ。最近多いんですよ」

「いえ、大したことはありません。しかし、今のは？」

背広の人物は喚きながら駆けていく。その言葉のほとんどは

だった。街のあちこちに設置された時計と同じく、色や形はまちまちの、しかしどれも同じ時刻を指す時計。Xだけがただ一人、「こちら側」の人間らしく、目と鼻と口を持つ頭を持つ時計の街に存在していた。

とはいえ、Xのような存在が迷い込むことはこの『異界』には珍しくないらしく、Xは「客人」として欲待され、案内人を名乗る時計頭に連れられて街を歩いてきた、その矢先での出来事だった。

Xが、案内人の言葉に首を傾げた……、ことがデイスブレイの動きから伝わってくる。

「治療、ですか？」
「ええ。お客様の故郷では、病

意味をなしていなかったが、俺がおかしいんじゃない、お前の方がおかしいんだ」

そう、聞こえた気がした。

時計の頭を持つ通行人は、背広の人物を避けるように、道の脇に寄っていた。そして、揃いの制服を着た、これまた時計頭の屈強な人々が、道の向こうから駆け付けようとしていた。

「ああ、通報があったようです。もう安心ですよ、お客様」

制服姿の時計頭によつて、背広姿の時計頭が取り押さえられる。それでも、背広姿の時計頭はなおも逃れようと暴れ続けており、簡単に引つ立てられてたまるか、という執念を感じる。

に侵された時にはどのような対処を取られますか？」
「病院に行き、医師の診断を受けて、治療を受ける……、のが、一般的ですね」

一般的、と言いつ添えて「こちら側」の常識を一言でくくろうとしない辺りに、Xの慎重な言葉運びが窺える。案内人は「そうですね」か「時計頭を領かせる。」「この街でも、それは変わりません。不調があれば病院へ。しかし、時には本人が気づかない間に病に侵されることがあります。そして、その病は周囲へも害を及ぼす、恐ろしいものです」

「感染症、ですか」
「そうです。彼は、その病に侵

に引きずられるように連れられていく。それは、Xの感想と同様に「患者」より「犯罪者」の様相であり、この『異界』においては時計の狂いが他の何よりも許されざることなのだ、ということがあるとわかる。

「故にこそ、治療が必要なのです。その人が正しい時を生きたるよう。狂った時計が、他の誰かの時計を狂わせないう」
「治療で元に戻るのですね」
「ええ、治療を受けさえすれば、今まで狂った時間を生きていたことも忘れて、我々と同じ日々に戻ることができますよ」

「なるほど」

「見苦しいところをお見せしてしまいましたね」

傍らの人物が声をかけてくる。Xは、その人物の時計の顔を見上げて、それからもう一度、未だ抵抗を続ける背広姿の時計頭を見やつて——言った。

「あの」
「何ですか？」

「ものものしい様子ですが、あの方は、何か犯罪でも？」

視線を戻しての問いに、傍らの時計頭は、「いえ」と重々しく首を横に振った。

「罪ではありませんよ。ただ、治療が必要なのです」

その文字盤は、辺りの時計たちと同様に、二時二十五分を指

と治療が必要だったのです」

「しかし、それは、誰にでも、判別可能なもの、なのです」
Xの声に怪訝な響きが混ざる。本人に自覚がないままに病に侵される、とはいうが、適当な理由で病人と認定されて捕まってはたまらない。

しかし、案内人は「もちろんです」と力強く肯定する。
「目にすればわかります、病に侵された本人以外は」
「……？」

Xの視線が案内人から、ついに抵抗むなく拘束された背広姿の時計頭に向けられる。そして「あ」と声を上げた。私も一拍遅れて、違和感に気づく。
「時計が」

なるほど。それはXの口癖だ。口癖であるから、真に納得しているか量ることは難しい。

しかし、今の声音は、普段よりずっと、納得に満ちていた。「いいですね。『狂っている』と一目でわかる。治療さえ受ければ、社会に『戻れる』」
私も——。

それ以上の言葉は、Xの口からは出なかった。

ただ、Xが、「こちら側」において殺人という罪を犯し続けた存在であることを、今更ながらに思い出してぞくりとする。「理想的な、仕組みです」
ぼつり、Xの咳きか聞こえた。